

受け継ぐ 想いと平和

糸満市では、「戦争を知らない世代の、さらに子や孫である若い世代」へ沖縄戦の実情や歴史を後世に伝える人材を育成することを目的に、平和の語り部育成事業を行っています。

平和を次の世代へどう伝えるか。平和ガイドや平和の語り部育成事業に関わる3人が、それぞれの経験をもとに語ります。

平和に対する想いの変化

石井彩絵さん(以下、石井)
平和の語り部育成事業に参加して、平和について本格的に学んだとき、「自分は何も知らなかったんだ」と思いました。学校で学んでいたつもりでしたが、それはほんの一部だったんです。戦争のことも、平和の意味も、実際に戦争体験者の話を聞いたり、戦跡を訪れたりする中で、初めて実感して理解できる

井出佳代子さん(以下、井出)

私も移住して気づいたことですが、沖縄は慰霊碑

や戦争の傷跡が今も日常の風景に溶け込んでいて、当時の記憶を残し続けている。もちろん、沖縄以外にも空襲や原爆の投下もありましたが、「生活の場が戦場になるとどうなるか」ということを沖縄にしていると強く感じます。現在は平和ガイドとして事業に携わっていますが、子どもたちから「命って何?」「どうして戦争は起きたの?」というまっすぐな問いに、私たちがどう答えるか。その答えを一緒に探す過程がまた学びになります。

上原大空さん(以下、上原)

私は担当職員として事業に関わっていますが、それまでは「平和」という言葉を表面的にしか理解してい



▲慰霊碑をガイドする井出さん

平和の伝え方

石井 私たちの世代は、戦争を経験した人が身近にいないので、だから戦争は遠い話になり、学ぶ意欲が沸かない。でも、語り部の活動を通して知った「戦争のリアル」は、誰かが伝えていかないと忘れられてしまう。だからこそ、私たちの世代がそのリアルを知り、伝えていく必要があると思います。ただ、現在

石井 彩絵さん

那覇国際高等学校2年生。糸満中学校1年時に初めて平和の語り部育成事業へ参加。以降、4年連続で同事業へ参加し、2024年度の事業では補助者として、事業のサポートを行う。



井出 佳代子さん

神奈川県出身で、東京、イギリス、長野を経て2012年から糸満市在住。来沖後から平和ガイドの勉強を始め、現在は糸満市観光ガイドのほか、県内各平和ガイド団体で活動している。



の教育現場で行われている平和学習では、戦争の内容を伝えることが重要視されているように思うので、小さい時から「平和って何だろう」と考える機会を作ってあげることが大切だと思います。



▲研修の成果を発表する石井さん

井出 そうですね。でも、戦争のリアルを知ること、これも重要だけど、戦争の話は残酷で、見聞きするとつらいもの。誰に対しても同じように伝えることができないから、伝え方を工夫する必要があります。それに、戦争が起こったことは重く受け止めなければいけないけど、語り部活動は戦争の悲惨さを伝えるだけでなく、その先に「だから私たちはどのよう

私たちにもできること

井出 私の夫は持病があり、戦争によって治療ができなくなった時点で命が尽きて

上原 平和という言葉はよく見聞きする言葉ですが、

平和を考えようというとなかなかイメージが湧かない。難しい印象を持たれると思います。でも、日常の中に平和を実感できる瞬間は多く、その何気ないときが「平和」のかたちだと思えますし、石井さんが話したように、それを感じ取る感性を育てることも大事なことだと思います。

上原 戦跡や慰霊碑が残り、

身近に平和について考えることができる場所が糸満市には多く残っていますので、ふとしたときに立ち寄ると平和を考える機会が増えると思います。また、市もイベントなどを通して、平和を考える機会をつくり出すので、気軽に足を運んでほしいです。特に、身近な人と一緒に参加して、平和について話し合うきっかけになればうれしいです。

石井 私も、まずは「身の周

沖縄戦を迫体験するー。

轟壕 360°バーチャルツアー

沖縄戦を語り継ぐ「物言わぬ語り部」として重要な役割を果たしてきた轟壕ですが、近年は安全確保のため、立ち入りが制限されていました。そのため、糸満市では、最新のデジタル技術を活用し、現在の壕内を360°自由自在に見ることができるバーチャルツアーを公開しています。

慰霊の日を前に、過去の出来事を知るため、一度閲覧してはいかがでしょうか?



バーチャルツアーは、2次元コードから閲覧できます。



上原 大空さん

企画部政策推進課で令和4年から6年までの3年間、平和行政を担当。平和の語り部育成事業担当者として事業に携わる。

